ネコばあちゃんとフクロウむすめ

よこやま　さよ

隣の家に住んでいるばあちゃんは、魔法が使えると思う。きっとそうに違いない。ばあちゃんは七十歳をいくつか越えていて、近所の子どもたちにはネコばあちゃんと呼ばれている。

真由美は二十九歳で派遣添乗員の仕事をしている。引っ越してきて挨拶に行ったときに、表札の出ていない家に住んでいるばあちゃんに名前を尋ねたら、「名前ねえ、忘れちゃったよ。私のことは、ばあちゃんと呼んでくれたらいいよ」と言われたので、それ以来そう呼んでいる。

真由美が住んでいるのは、五軒連なっている二階建ての長屋である。築五十年は過ぎていて、ずいぶんガタが来ているのだけれど、その分家賃は格安である。五軒のうち、一人暮らしは、真由美と隣のばあちゃんだけだ。

真由美が仕事に行くときは、たいてい黒のパンツスーツである。肩までの髪をシュシュで束ねてリュック型の鞄を背負い、駅まで二十分ほど自転車をこいでいく。朝家を出るとき、ばあちゃんはよく庭を掃いていて、「おはよう、いってらっしゃい」と挨拶をしてくれる。そばにはいつも数匹の猫がいて、ばあちゃんが掃除を終えるのをおとなしく待っている。ばあちゃんは朝からいつもおしゃれで、染絞りのワンピースやロングスカートをよく身に着けている。真っ白な髪をショートボブにしていて、耳たぶには金色のピアスが光っている。

野良猫たちは、ばあちゃんにとてもよくなついている。いくら餌をもらっても人間にはなつかずに、いつも毛を逆立てて唸っていた猫が、ばあちゃんには最初からコロッといかれて足元に身体を摺り寄せているのをみて、真由美は唖然としたことがある。

ばあちゃんの家は、来客が多い。ほとんど女性だけれど、たまに男性もくる。若い人から年配の人まで、神妙な顔をしてばあちゃんの家に来る。出てくるときは表情が緩んでいて、見送りに出ているばあちゃんと笑顔で挨拶をかわしていたりする。あの人たちは、いったい何をしに来ているのか真由美はいつか聞いてみたいと思っている。

この長屋は駅から遠いし古いけれど人気があって、誰かが転居するとすぐに部屋は埋まった。家賃が安いということもあるけれど、賃貸では珍しくペット飼育可と、リフォーム可だというのが人気の理由である。最初に見に来たときは、黒ずんだ古い畳とはがれかけた砂壁の家であったが、好きなように改装してくれて構わないと言われて、真由美はここを選んだ。ものづくりが好きな真由美は、休みの度に、一人で少しずつ改装していった。砂壁に下地液を塗って、上から珪藻土を塗る。畳をはずして、フローリングの板を貼っていく。柱は磨いてニスを塗りなおす。壁にはムラがあるし、床板はゆがんでいるところもあるが、細かいところに目をつぶれば十分で、真由美は満足していた。ここに好きなものばかりを置こう。テレビは音がうるさいから置かないで、照明は柔らかい光のものにしよう。本を読むときの為に、読書灯をひとつ置こう。自分のお城ができると、真由美はわくわくした。こんな

気持ちになるのは、久しぶりだった。

真由美以外の四軒は、それぞれペットを飼っていた。ばあちゃんは、野良猫たちの具合が悪くなると病院に連れて行ったり去勢避妊手術をしたりフンの始末をしたりと面倒を見ていたが、自分の家にも年老いた黒猫がいた。クロと言う名前は想像通りだった。真由美は何も飼っていなかった。自分が責任を持たなければならない生き物が家にいるのは無理だと思った。動物も人間も嫌いじゃない、むしろ好きなのだが深く関わりたくはない。派遣の添乗員をしているのは、旅の間だけの関係で済むからだ。毎日同じ場所に出勤して同じ人と一緒に働くのは、嫌だった。駅や空港で集合して、また同じ場所で解散する。その関係が心地よかった。

真由美は、時々夜中に目が覚めてそのまま明け方まで眠れないことがある。目が覚めたら、ベッドサイドのデジタル時計を見るのが癖になっている。手を伸ばしてその小さな目覚ましをこちらに向ける。1：42　もうすぐ丑三つ時だなあと、以前に添乗の仕事で訪れた神社のことをふと思い出した。標高が高いところにあるその神社は、真夏でも気温が低く過ごしやすく、高く伸びた樹木に囲まれて下界とは空気感が違っていた。恋愛祈願でも有名で昼間は観光客の多いところであるが、丑の刻参りでも有名であるとバスガイドが説明していた。

ダメだ、早く眠らなくてはいけない。六時には起きないといけないのに、余計なことを考えている場合ではない。布団の中でまんじりともせずに眠ろうとしていると、四方八方からどんどん闇が迫ってきて、その中に閉じ込められそうになる。

そんな日が何日か続くと、日中常に頭の中に薄い靄がかかっている状態になる。仕事中はミスをしないように気を張りつめているが、身体がかちこちに固まって、ますます夜に眠れなくなるという悪循環に陥る。

ばあちゃんから声をかけられたのは、そんな夜が続いた日のことだった。休みの日に、小さいベランダに洗濯を干していると、ばあちゃんが窓から顔を出した。

この前、あなたの洗濯物がうちに飛んできていたよ、取りにおいでよ。

すいませんと言って、真由美は急いでばあちゃんの家の玄関にまわった。ばあちゃんは扉を開けて、中に入るように促した。ここで渡してくれたらいいのにと真由美は少し不服に思ったが、好奇心も手伝って言われるままにばあちゃんの家にあがった。

家の中はきれいに掃除されていた。砂壁を隠すように、大きなカラフルな布が壁を覆っていた。畳の上には、ラグが敷かれており、その上に籐のテーブルと椅子が二脚置かれていて、古い長屋の部屋が、まるで南国のコテージのようだった。

「この子はね、決まったところでしか爪とぎをしないのよ。おりこうでしょう」

真由美の心の内を読んだように、ばあちゃんは窓際で眠っているクロを見て言った。そして、お茶の入ったティーカップを二つテーブルの上に置いた。

「これね、私がブレンドしたお茶なのよ。それとカップも私のお手製。うまくできてるでしょう」

天井には大きな三枚羽のファンが吊り下がっていて、ぬるい空気を静かに攪拌していた。時折、網戸がはめ込まれている窓を通して、鳥の鳴き声が聞こえている。

真由美はカップを手に取った。少々いびつだけれど、温かみのある深い色をしていた。穏やかな香りが鼻腔をくすぐる。そっと口に含んでみた。

「おいしい」

癖のない味と香りだった。

「飲みやすいでしょう。知り合いが有機栽培で作っていて、何種類か送ってくれるんだよ。血行を良くして毒素をだしてくれるよ。それにカフェインが入っていないから、眠れなくなることもないしね」

ばあちゃんは、真由美を見て軽く微笑んだ。自分の不眠を見透かされたようで、真由美は少し居心地が悪くなった。

「あの、洗濯ものを……」

ああ、そうだったねとばあちゃんは腰を上げて、真由美のTシャツを持ってきた。それはアイロンがあてられてきれいにたたまれていた。

「風で飛んだのですね。すいませんでした」

真由美はバツが悪くなって、それをごまかすように冷めかけたお茶をがぶりと口に含んだら、むせて咳きこんでしまった。大丈夫かい、そう言ってばあちゃんは真由美の背中をそっとさすってくれた。

「落ち着いたら、ゆっくり呼吸をしてごらん」

咳が収まった真由美は、ふうっと息を吐き出した。

「背中がずいぶん固いね。身体がつらいことはないかい」

ばあちゃんは、真由美の肩甲骨あたりに軽く触れていた。

「あまりよく眠れなくて……」

言いよどんだが、隠すことでもないだろうと真由美は正直に言った。ばあちゃんは向かいの椅子に座り直して、もう一度真由美を見た。

「血行がよくないんだろうね。呼吸で改善することができるよ。ちょっとやってみるかい」

真由美はクマのできた目を二、三度瞬かせて、こくりと頷いた。

「それじゃまずね、骨盤を立てて、その上に腰を乗せるような感じで座ってごらん。頭の中心を天井から吊るされているような感じで。そうそう」

天井から透明なピアノ線が下りてきて、自分の脳天とつながっている、そんな想像をして、真由美は言われたように背中を伸ばした。

「鼻から息を入れて、おなかの中いっぱいに行き渡るようなイメージでね。吐くときは口から、細く長く吐きだして。肋骨を寄せていく感じでね」

真由美は軽く目を閉じてゆっくりと呼吸を繰り返した。穏やかで少し低いばあちゃんの声が聞こえてくる。

おへそのちょっと下の丹田を意識して、自分の内側に意識をむけて。細く長く、ゆっくり

ゆっくりとね。

時折、窓から心地よい風が入ってきて、吊るされていたガラスの風鈴がちりんちりんと涼やかな音を立てる。深く呼吸を繰り返すたびに、新鮮な空気が身体を満たして、いらないものが少しずつ出ていくような気がしてきた。

一呼吸するごとに落ち着いてきて、身体が軽くなって気持ちも軽くなって、空気の中に溶けていきそうになる。

そのとき、足首に何かやわらかいものが触れた。目を開けると、先ほどまで眠っていたクロが、真由美の足元にいて、顔を見上げて、ちいさくにゃおと鳴いた。

急に目を開けたので、窓を通して入ってくるやわらかい陽光がとてもまぶしく感じた。

「寝る前に、今の呼吸をやってみるといいよ。布団に寝転がって、身体から力を抜いてやってごらん。よく眠れるといいね」

帰るときに、これお土産だよと言って、ばあちゃんは先ほど飲んだブレンドティーの葉をもたせてくれた。クロも玄関まで来て真由美を見送ってくれた。

眠れない夜は、とても孤独だ。深夜起きている人はたくさんいて、仕事をしていたりお酒を飲んで騒いでいたり、部屋でゲームをしていたり、それぞれの時間を過ごしているのだろう。それでも、真夜中に目が覚めると、今起きているのは世界中で自分ひとりだけのような気になってくる。もしかすると時間が止まっていて、今意識があるのは自分だけで、普段見えない世界にいる何かが、みんなで息をひそめて暗がりから自分のことをそっと見つめているのかもしれない。ジワリと汗が出てきて、首筋に髪の毛が張り付いている。寝返りを打ったら、自分がここにいることを誰かに気づかれそうで、動くのが怖い。喉がカラカラに乾いている。昔付き合っていた男の顔が暗闇の中に浮かんでくる。理不尽なことを言われて、それでも無理に微笑んでいた光景がよみがえる。勝手なクレームをいれてきた客や陰口をたたいていた同僚たちの顔が次々と浮かんでは消える。やりきれなかった気持ちが再現され、のど元が締め付けられるように苦しくなってくる。

何十億の人間が一人一人皆気持ちを持っていて、それぞれ何かを好きで何かを嫌いで生きていて誰もが自分と違っている。何十億の思考が混ざり合った濁ったスープのような世界の中を、何にもぶつからないですいすいと泳いでいくなんて絶対に不可能だ。

眠るのをあきらめて、枕元のライトをつけた。キッチンに向かい、冷蔵庫の中から水の入ったボトルを取り出し、一口飲んだ。草木が水をもらって喜んでいるように、ほんの少しだけ、死にかけていた細胞がよみがえった気がする。部屋に戻ってライトを消し、ベッドの上に仰向けに寝転がった。両手を軽く脇に沿わせて、手のひらを上に向ける。網戸の向こうから、夜風がはいってきて、カーテンの裾を揺らしている。軽く目を閉じて、ふうーっと鼻から息を吸い込んだ。それから少しずつ細く長い息を吐いていく。自分の中の汚いもの、まっさらで生まれてから少しずつ体内に堆積していったドロドロしたものを、全部吐き出してしまいたい。すべて体内から吐き出せたら、きっと楽になるにちがいない。目に見えない鎖

をほどいていくのをイメージしながら、真由美は深く呼吸を繰り返す。夜風が真由美の吐く息と混じりあっていく。どこからか、かすかに犬の遠吠えが聞こえてきた。

初めてばあちゃんの家にお邪魔した翌週、真由美はお茶と洗濯物のお礼の品を持ってばあちゃんを訪れた。真由美がばあちゃんに渡したのは、黒猫をモチーフにした手作りのブローチだった。

「あら、かわいい。あんたが作ったの？」

「はい、こういうの作るの好きなんです」

クロが近寄ってきて、ばあちゃんの持っているブローチのにおいをかいでいる。

ばあちゃんは真由美に礼を言い、さっそく薄紫で白い小花模様のワンピースの胸元にブローチをつけた。

「よく似合っています。そのワンピース、もしかしてばあちゃんが作ったんですか」

「目ざといね。これは着物を仕立て直したんだよ。あんたもよくかわいい鞄やアクセサリーを持っているけど、手作りだったのかい」

真由美は、休日はシャツにデニムという何の変哲もないスタイルだったが、よくネックレスやスカーフを合わせていた。

「アクセサリーはだいたい自分で作ってるけれど、鞄やポーチは山岳民族の工芸品です。添乗の仕事でタイやベトナムに行ったときに買ってるんです」

クロが真由美の膝にのぼって、胸元のネックレスを前足でちょいちょいと揺らした。

その日以来、真由美は度々ばあちゃんの家に遊びに行くようになった。二人でテーブルをはさんで、とりとめのない話をする。ばあちゃんは、とても博識だった。それに、体力もあった。

「脇はリンパの下水道というからね、身体をしっかり伸ばせばいいんだよ、ほらこうやって」

ばあちゃんは、室内用のはたきをもって上に右手を伸ばし、そのまま左のほうに上半身を傾けていく。

「こうすれば胸が開くだろう。血流がよくなるんだよ。朝起きたら、庭掃除をしながらやってごらんよ」

真由美も立ち上がり、ばあちゃんの真似をしてみる。二人のそばで、クロが後ろ足を立てて、背中を伸ばしている。

「呼吸を忘れてはいけないよ。決して息を止めないで、しっかり呼吸をいれるんだよ」

いろいろなポーズを取りながら、細く長く息を吐いていく。

光がたくさん入ってくるばあちゃんの家で、一緒に過ごすのは、とても落ち着く時間だった。

着信音が鳴って、ポケットに入れていた真由美の携帯が震えた。画面をスライドして、内容を確認する。そのまま、何事もなかったかのように、再びポケットにしまった。

「返事しなくていいのかい」
真由美の顔が一瞬曇ったのを、ばあちゃんは見逃さなかった。
「うん、いいんです。なんかもう面倒になってきちゃって」
「人との関係には、面倒がつきものだよ。この子と違ってね」
ばあちゃんは、膝の上に乗っているクロの毛をブラシで梳いた。クロは気持ちよさそうに目を細めていた。
「あまりにしんどい相手なら思い切って離れることも必要だけどね。負担が大きすぎると少しずつ気持ちが削れてくるからね」
お茶もう一杯もらってもいいですかと真由美は聞いて、ブラッシング中のばあちゃんの代わりに自分でケトルに水を入れてコンロにかけた。
「たぶんね、私は人とうまく付き合えないと思うんです。特に男の人」
真由美は視線を宙に漂わせた。
「中学の時に意地悪な男子がいて、ノートに一生処女って書かれたことがあって。それから、自分は一生誰にも愛されないんじゃないかってすごく恐怖だった」
「そうかい、それでまだ処女なのかい」
ばあちゃんはずけずけと言った。
「いや、そうじゃないけど」
「それなら問題ないでしょう」
「専門学校に行ってた時に、初めて彼氏というか、そんな感じの人ができたんですけど」
真由美はティーカップに口をつけようとし、それが空だと気づいて、ソーサーに少し乱暴にカップを戻した。
「会いたいって言うくせに、お前がもっと可愛かったらよかったのにとか、誰それは綺麗だとかよく言われていて」
「そんな男と良く付き合ってたね。身体を目当てにされてたのかい」
ばあちゃんは容赦がなかった。
「それが、ほとんどなかったんです。今思うと母性を求められてたと思う。でも十八の女性に母性ってきつくて。女性として愛されたかったな」
ばあちゃんは軽く頷いた。
「もっと年齢がいけば何役も演じられる女性もいるし、そういう関係もありだと思うけど、初めての恋人だときついだろうね。どっちにしろ、あんたをけなす時点で、そんな奴は駄目だよ。精神的なサンドバッグにされていたようなもんだよ」
「でも一人は寂しくて、何年もだらだらと付き合っちゃいました」
一緒にいると寂しくなかったのかいと、ばあちゃんは聞いた。
「わからない。でも、自分の中の何かがどんどんすり減って壊れていったような気がします」
ケトルがピーっと高い音をたてた。それを合図のように、クロがばあちゃんの膝の上から

降りた。ばあちゃんは、立ち上がって葉っぱの形をしたミトンでケトルを持ってティーポットにお湯を注ぎ、テーブルの上の砂時計をひっくり返した。青い砂がさらさらと流れて時間を刻んでいく。

「その人と別れてからは、けっこういろんな人と付き合いました。女性として誘ってもらえるのが嬉しくて。でも、長続きしませんでした。付き合ったっていうより、寝ただけかもしれない」

壊れたところを補修しなきゃいけなかったからと、真由美は言った。

「コンクリートのひび割れにセロハンテープを貼っているようなものでしたけど」

言い訳はいらないんじゃないかいと、ばあちゃんは言った。

「寝たかったから寝たでいいんだよ。まあ、若い娘には理由が必要だったのかもしれないけどね」

真由美は少し傷ついた顔をした。

「でも、最初の彼氏が丸ごと自分を愛してくれたら、そんなふうにならなかったと思うんです」

砂時計の流れが止まった。猫ばあちゃんは、ティーポットのお茶を、真由美と自分のカップに注いだ。やわらかい湯気があたりを包んでいる。一口飲むと、胸のあたりがぽわんと熱を持ったような感じがした。

ポケットの中で再び携帯が震えた。真由美は携帯を取り出し、画面を見て眉を寄せた。

「今の彼氏が、家の近くまで来てるんです。家まで来られるのは嫌だから、ちょっと行ってきます」

「あらまあ、大変だね」

ばあちゃんの言葉を聞き終える間もなく立ち上がり、真由美は出ていった。

「どうして、お前の家じゃダメなの」

カフェで向かい合っている隆は、不機嫌さを隠そうともしなかった。以前勤めていた旅行会社で同僚だった隆とは、会社を辞めてから何度か誘われて食事に行き、付き合うようになった。

「突然来られても……。散らかってるし」

真由美は隆を家に上げたくなかった。あの場所は自分で作った自分だけのお城だ。

「どこか遊びに行こうよ。いいお天気だし」

「どこも混んでいるだろう。仕事で疲れているんだ。二人でゆっくりしよう」

隆は、まだ長い吸い殻を灰皿に押し付けた。

「お前最近、ラインの返信遅いよな」

「会う約束するときしか、ラインくれないじゃない。それに、隆、理沙とも時々会ってるでしょう」

唐突に言われて、隆は口元をゆがめた。理沙も真由美の以前の同僚だった。部署が違い、

あまり話したことはなかったが、小柄で童顔でおっとりしていて、社内でお嫁さんにしたいナンバーワンだと言われていた。
「理沙がフェイスブックに写真載せてるよ。二人であちこち出かけたときの写真」
隆は少し慌てた様子で、グラスの水を飲んだ。
「違うんだよ、それは。同僚として相談にのっているだけ。真由美とは全然違う」
「どう違うの」
「なんていうか、好きの種類が全然違うんだよ。哲学でいうとアガペとエロスっていうか、女として好きなのは真由美だよ」
な、わかっているだろうと隆に顔を覗き込まれて、真由美は視線をそらすことができずに、頷いてしまった。二人はカフェを出て車に乗り、しばらく走った後、隆は車をホテルの駐車場に入れた。理沙のことはうやむやになった。
「来週の金曜の夜は家に行ってもいいだろう」
帰りの車内で、隆はまた当然のように言った。
「旅行に出てるから」
「お前、休みだっていってなかったっけ？」
「プライベートの旅よ。一週間休みがとれたから、日本からのツアーじゃなかなか行けないところに行くの」
「そう、わかったよ」
どこへ旅行に行くのとも聞かずに、隆は車を止めた。ここでいいだろうと、最寄り駅の前で真由美を降ろし、またなと行って車で走り去っていった。

「それで、アガペとエロスってなんだろうって、帰ってから調べたんです」
真由美はばあちゃんの家にいた。
「それでもなんかよくわからないんです。アガペは神の愛、無償の愛って感じで、エロスは人間の愛、性愛だとか書いてあったけど」
「その彼氏の解釈はちょっとおかしいよ。そいつは、哲学のことなんて何もわかってないね。でも結局、本命は別の女性であんたは性愛の対象って言われただけじゃないの」
ばあちゃんに言われて真由美はうなだれた。
「そうだと思います。というか、わかってるんだけど断れないっていうか。どうして私、こんな付き合いばかりなんだろう」
真由美は、ばあちゃんの焼いてくれたスコーンを一口食べて、お茶を飲んだ。
「呪いだね」
いきなり、ばあちゃんはぼそりと呟いた。
「えっ、ノロイって」
ばあちゃんの口から思いがけない言葉が出て、真由美は驚いて聞き返した。
「きっかけは、中学の時のノートや初めての彼氏の振る舞いだったのかもしれない。でも

ね、あんたは自信をなくして自分で自分に呪いをかけているよ。そんな扱いをされて良いはずがないだろう」

真由美は少し下を向いた。足元にクロがすり寄ってきた。

「前に勤めていたところで、誰とでも寝る女だって陰口をたたかれていたことがあります」

クロが真由美の膝の上に乗ってくる。

「でも、誰とでもじゃない。いつも私は相手が好きで、そして好かれたかった。ばあちゃんの言うノロイを解くために、必死になってるんだと思います」

ばあちゃんは小さく頷いた。

「あんたの言ってることはわかるよ。でもね、今のままじゃ夜中に寂しい寂しいって一人で鳴いているフクロウだよ。誰かを待っていてはいけないよ。白馬の王子さまは万能じゃないんだから」

膝の上のクロが、真由美の胸に身体をこすりつけている。

「この子みたいに時々甘えて、おとなしく何も言わずに待っていたら、愛されるのかな」

「馬鹿なことを言うんじゃないよ」

ばあちゃんはぴしゃりと言った。

「言いたいことは言えばいいんだよ。それにね、愛されることばかり考えなくていいんだよ。そのままじゃ、誰と付き合おうがたとえ結婚しようが、ずっと満たされることはないよ」

でも、と真由美は呟いて猫の頭をなでた。

「でも、私は愛されたいし、褒められたいし、認められたい」

「他人の評価が基準になっていたら、しんどいよ」

ばあちゃんの声は穏やかだった。そして、優しい笑顔で真由美を見た。

「呪いを解くことができるのは、自分だけなんだよ」

それに答えるかのように、クロがにゃおと小さく鳴いた。

目が覚めた時は、一瞬自分がどこにいるかわからなくなる。徐々に覚醒してきて、たいてい自分の部屋のベッドで身体を起こしているのだが、その日はずいぶん勝手が違っていた。身体の節々に軽く痛みがある。闇に目が慣れてくると、周りの様子が徐々にわかってきた。板の間に毛布をしいて、数人が雑魚寝していた。真由美の隣には白人のカップルが寝ていて、二人で毛布にくるまっていた。

ああ、そうだ、旅に出ていたんだ。

真由美は今、タイの北部の山の中、ミャンマーとラオスの国境あたりにいる。一週間かけて、山岳民族の村をめぐるツアーの最中だった。山岳民族の衣装や工芸品に興味がある真由美は、いつか来てみたいと思っていた場所だった。バンコクで申し込んだそのツアーメンバーは八名で日本人は真由美だけだ。村には当然ホテルなどなく、村人たちの山小屋を借りて宿泊させてもらう。

腕時計を見ると、まだ夜の三時、日の出までにはしばらく時間がある。もう一度寝ようと

したが、なかなか寝付けない。そっと山小屋の扉を開けて、外に出てみた。月明かりであたりはぼんやりと明るい。斜面に点々と小屋が立っていて、その中で住人たちや旅人たちは、それぞれ夢を見ているのだろう。昼間は豚や鶏があたりを悠々と歩いているが、今は人間も動物も誰も見当たらない。夜の空気は冷たくて、真由美はカーディガンの胸元を掻き合わせた。

草を踏む音がして、後ろを振り返った。現地ガイドのカイが小屋から出てきた。小柄で真由美と同じぐらいの年の男性で、癖のない英語を流暢に話した。

「真由美さん、何してるの」

「うん、ちょっと夜の空気を吸おうかなと思ってね」

カイは真由美の隣に立って、木々の生い茂っている森のほうに視線を向けた。ぼわんとした丸い月が、木の上にかかっている。

「何を見ているの？」

ちょっと待ってごらんとカイは言って、しばらく二人はその場にたたずんでいた。時折木々の葉が風で揺れる音がして、その合間にホゥーホゥーという鳴き声が微かに響いた。

「ほら、きた」

カイが言ったのと同時に、森のほうから何かが飛んでくるのが見えた。大きな茶色の翼を広げたフクロウだった。月の光を背に受けて、まるでスポットライトを浴びているように、この世界の主役は自分であるかのように、大きな翼をはためかせていた。真由美は呆けたように、その主役を目で追っていた。翼が風をきるというまさにその言葉のままに、誰もが寝静まった真夜中の空を自由に悠々と飛び回っていた。真由美は身じろぎもせずに、見つめていた。

突然、フクロウは急降下した。そして地面を走っていた野ネズミをその鋭い爪で一撃でとらえた。真由美は、声をあげそうになったが、かろうじてこらえた。フクロウは野ネズミを掴んだまま飛び上がり、来た時と同じように悠々と翼を広げ、森へ戻っていった。

真由美はしばらく動けなかった。じっとして、フクロウが消えていった森のほうを見るともなく見ていた。

「時々やってくるんだよ」

カイの言葉に突然真由美は我に返った。

「鳴き声が聞こえたから小屋から出てきたんだ。いいタイミングだったね」

真由美は頷いた。

「なんだか少し怖くて、でも神々しかった。迷いもなく一直線に急降下して、獲物を捕らえるのね」

「僕は隣国出身なんだけれど、そこではフクロウは幸運の象徴なんだよ」

フクロウが去っていったのを見計らっていたかのように、あたりに虫の鳴き声が響き始めた。カイは静かに話し始めた。

「僕はね、いつか大きな世界に出ていこうと思っている。両親のため、国のため、そして何

より自分のためにね」
　そのためにお金を貯めているんだと、フクロウの去っていった森の方を見た。
「君たち日本人のように、自由に世界に出ていくのは、なかなか大変なんだ。時々、立ち止まって迷うんだよ」
　そういう時に、フクロウを見に来るんだとカイは言った。
「勇気が出るんだよ。そして、また前に進もうと思えるんだ」
　真由美は頷いた。
「真由美さんにはなんか夢があるの」
「うん、いつかね、自分が作ったアクセサリーをたくさんの人が身に着けてくれたらいいなと思ってる」
　今まで形になっていなかった思いが、するりと口から出てきた。
　きっとかなうよと言って、カイは空を見上げた。
「この空は日本まで続いているんだよね」
　カイは真由美を見て少し笑った。
「いつか日本にも行くよ。きっといつかね。そして、真由美の作ったものを買うよ」
「うん、きっと来てね」
　真由美もカイを見て微笑んだ。
　流れてきた雲が、月の表面を覆った。あたりは漆黒の闇に包まれた。それでも全く恐怖はなかった。先ほどのフクロウの飛翔が、真由美の脳裏に焼き付いていた。
「朝までまだ間があるよ。もうひと眠りしよう。明日の山歩きはハードだよ。体力回復させておかないとね」
　カイに促されて、真由美は小屋に戻って行った。

「はい、これお土産です」
　帰国した真由美は、さっそくばあちゃんの家に遊びに来ていた。
「あら、かわいいじゃない。嬉しいね、ありがとう」
　それは細かい刺繍が施されているカラフルな布のバッグで、持ち手にフクロウのマスコットがついていた。
「山岳民族の手作りなんです。フクロウは幸運のお守りだって」
「このフクロウ、目がくりくりしていて、いいねえ。うちのクロみたいだね」
　ばあちゃんは、鞄を肩にかけて嬉しそうだった。揺れるフクロウを狙って、クロが手を伸ばしている。
「それで、旅先では眠れたのかい」
「わりと眠れたほうだと思います。でも一度夜中に起きたときに、本物のフクロウを見たんです」
　そういって真由美は、話し始めた。

「狙いを定めたら一直線でした。ちょっとでも他に気を取られたり、迷いがあったりしたら絶対無理だと思う。目と耳で獲物を見つけて、これだって決めたらもう真っすぐに向かったんです」
　ばあちゃんは、フクロウのマスコットを触りに来ようとするクロを見て言った。
「そりゃ、この子とは違って野生だからね。必死で生きているんだよ。待っていても誰も餌をくれないからね。必要なものは自分で狩りに行かないとね」
　真由美は微笑んで、ばあちゃんの淹れてくれたお茶を飲んだ。ばあちゃんは、フクロウのマスコットを鞄から外して手のひらに乗せ、まじまじと見つめた。
「なんだかフクロウってあんたに似ているね。夜中に起きているし、時々ないてるし、そして肉食だしね」
　真由美は飲んでいたお茶を吹き出しそうになった。
「肉食……かなぁ」
　ばあちゃんはフフフと笑った。
「昔の私を見ているみたいだよ」
「ええ、そうなんですか？　想像できないんだけど」
「私も生まれた時からばあちゃんだったわけじゃないからね」
　ばあちゃんの若いころってどんな感じだったんだろうと、真由美は思いを巡らせた。それに気づいたかのように、ばあちゃんは話し続けた。
「そりゃあ、もてたよ。言い寄ってきた殿方は両手両足の指では数え切れないね」
　それはちょっと大げさだろうと真由美は思ったが、敢えて口には出さなかった。
「私が若いころは女性の地位も低くてね、枕に顔を押し付けて、声を殺して泣いたもんだよ」
「ちょっと信じられない」
　思わず、真由美の本音が口から洩れた。
　ばあちゃんは苦笑した。
「でもね、今となってはすべて過去のことだよ。どんなに憎んでもね、遠い遠い昔話さ」
「ばあちゃんでも人を憎むことがあったんですね」
　真由美は少し驚いた。
「もちろんだよ。丑の刻参りをしようと、藁人形をつくったこともあったぐらいだよ」
「ほんとに？　夜中に行ったの？」
「さあ、どうだったかね。昔すぎて、もう忘れてしまったよ」
　ばあちゃんでもそんなことがあったんですねと、真由美は言った。
「誰にでもあるよ。でもね、そんなことで使う力は負の力なんだよ」
「ふ？」
　そうだよと、ばあちゃんは言った。
「昔の男なんて、鼻くそみたいなものだろう。そんな奴のために、自分の気持ちが濁るのは

馬鹿らしいよ。呪いの言葉だけを自分の中に残していてはいけないよ。自分を解放してやるんだよ」

本当にそうだと真由美は思った。女の恋は上書きで、過去の男のことなんて、もう全く未練も何もない。

でも、嫌な気持ちを自分の中から消してしまうには、どうしたらいいのだろう。すべて削除する消去ボタンはどこにあるのだろう。

そう聞いたら、ばあちゃんは答えてくれた。

「今のことを考えるんだよ。今、あんたは今ここにいて、呼吸をしていて、お茶を飲んでいて、膝の上に猫がいて、心地よく過ごしているだろう。いつも今のことを考えてごらん。今心地よく過ごすことを考えてごらん」

出来るだろうか。そうすれば、もう嫌な過去とは離れられるだろうか。

ばあちゃんは言葉を続けた。

「昔の自分を癒せるのは今の自分だけだよ」

「どうやって？　どうやってやるの」

真由美は身を乗り出した。

「退行催眠で過去に戻るの？　ばあちゃん、催眠術がかけられるんですか」

「そんなことできないよ」

ばあちゃんはにべもなく言った。真由美は以前から聞きたかったことを聞いてみた。

「でも、よくお客さんが来てるじゃないですか。カウンセリングかセラピーか占いか、何かやってるんじゃないですか」

「そんなこと何もできないよ。一緒にお茶を飲んでるだけだよ。私はただの毒舌のばあさんだよ」

真由美は疑わしい目でばあちゃんを見た。

「でも、身体のことをよくご存じですよね」

「昔、ヨガと漢方をかじったことがあったからね」

すごいと、真由美は言った。

「それじゃ、ばあちゃん漢方医なんですか？」

「いや、違うよ。一人目の夫がインド人で、二人目が中国人だったってだけだよ」

「……」

まったく、ばあちゃんの話は、どこまでが本当かわからない。

真由美はさらに食い下がる。

「でも、誰にもなつかない野良猫たちも、最初からばあちゃんにはゴロゴロすり寄ってるじゃない。何か術をかけてるんでしょう」

「まあ、確かに魔法の粉は持ってるけどね」

ばあちゃんは、引出しから小さな袋を出してきて、真由美の目の前でひらひらと振った。

それには、またたびと書かれていた。

その時、ポケットの中で真由美の携帯が震えて、クロが膝の上から飛んで床に降りた。登録したカイからのラインだった。

〔ビッグニュース！　突然欠員が出て、日本の研修に行けることになりました。一週間だけなんだけど、会えるといいね〕

そう書かれた文面を見て、真由美は顔がほころんだ。

「私も国際結婚を目指そうかな」

ぼそっと呟くと、次の文が送られて来た。

〔彼女も一緒に行くので、紹介するよ〕

はいはい、そういうことね。３秒で失恋しちゃった。

お茶を淹れに席を立ったばあちゃんの背中を見て、真由美はひとりごちた。

その次に送られてきたのは写真だった。大きな月を背景に、空を飛ぶフクロウのシルエットだった。

大きくはばたく羽の音が、耳元で聞こえたような気がした。

（了）